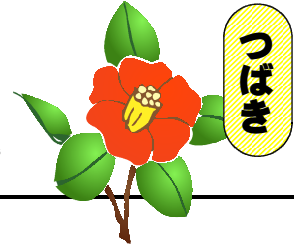




ちぐさ咲く みち



ほ ごとく い 褒め方の極意

校長 花生 典幸

新年明けましておめでとうございます。

皆さまにとりまして、今年がよい一年になりますよう、心よりお祈り申し上げますととも、さらなるご支援・ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

さて、新年早々予想だにしない痛ましい災害や事故が重なり、気持ちが落ち着かないまま新しい年のスタートを迎えることになりましたが、1月15日（月）、冬休みが終わって、子どもたちの明るい元気な声が教室にあふれ、学校に活気が戻ってきました。

この冬休みは、保護者や地域のみなさまのご協力と見守りのおかげにより、大きな事故等がなく無事に終えることができました。心より感謝申し上げます。

「褒める」という行為には、三つの効果があると言われています。

- ① 褒めた相手から好かれる
- ② 褒めるために相手をよく観察するようになる
- ③ 褒められる人は、やる気を起こして、さらに褒めてもらおうと努力する

ただし、褒めるときに気をつけなければならないポイントも三つあるそうです。

- ① あれもこれも取り上げて褒めるのではなく、できるだけ一点に絞って褒める
- ② 何が、どんなふうに良かったのか、具体的に指摘しながら褒める
- ③ 結果を褒める（そこに至るまでのプロセスが大事という人もいますが、褒められてうれしいのは、あくまでも結果です。「結果はともかくとして、よくがんばった！」では、次の意欲にはつながりません。「この結果のこの部分には、あなたのこんな良さがよく出ている。素晴らしい成果を残したね」……こっちの方がやる気が湧いてきますね）

褒めるには、リスクもあります。相手にお世辞や口先だけと思われることです（それを防ぐ究極の賛辞は「〇〇さんがあなたのことを褒めていたよ」と第三者の口を通して耳に入れる方法だそうです。「ウインザー効果」と言います）。

人の欠点は努力しなくても見えますが、褒める点は、努力して考えていないとよく見えてこないものです。褒める行為に、あるいは褒める言葉に説得力をもたせるためには、「相手を深くよく知る」ということが、まずなにより大事なのですね。

今年度も残すところ二ヶ月半ほどになりました。学校でも、家庭でも、子どもたちの成長や進歩に、ていねいに目を凝らしながら、お互いにたくさん褒めることに努めていきたいものだと思います。

冬の寒さに負けずに、元気いっぱい楽しく学校生活を送れるよう子どもたちを励ましてまいります。よろしくお願いいたします。

